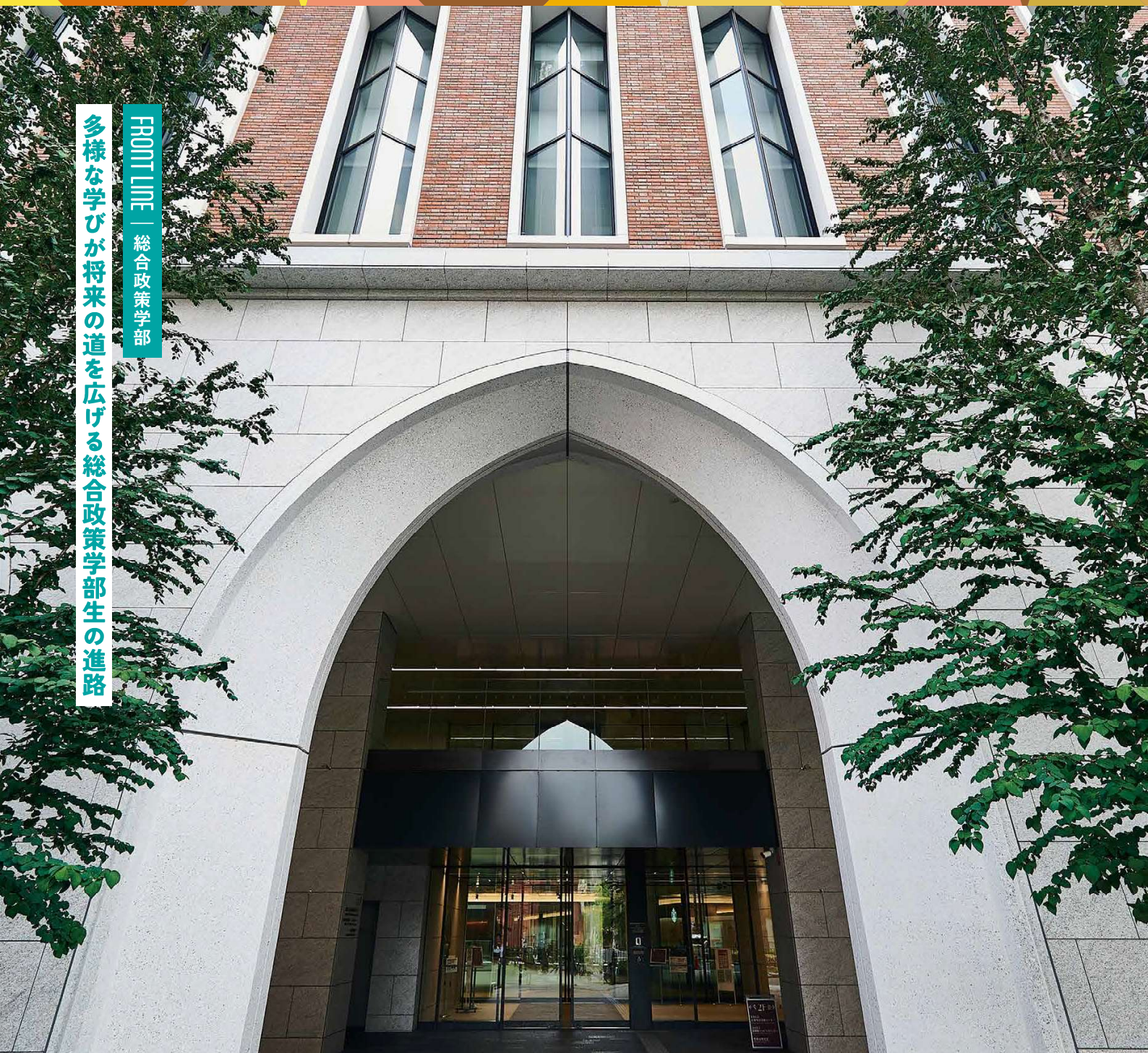


# 草のみどり

Kusa no Midori



多様な学びが将来の道を広げる総合政策学部生の進路

FRONTLINE | 総合政策学部

FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

# 世界を動かす人になろう

Vol. 27

企業経営とグローバル経済の先端知識、優れたコミュニケーション能力を養うべく、国際経営学部生は前進を続けています。

世界の扉を開ける鍵、それは「気づく」こと

2020年4月。国際経営学部の2期生として、私はこの大学に入学した。英語を使って学ぶという大胆なカリキュラムと必修の短期留学に魅了されたこの学部を選んだが、入学直後のパンデミックの影響で、私の世界に羽ばたく翼は折られた。留学はおろかキャンパスにも行けない状況に、行き場のない感情をただなだめることしかできなかった。



国際経営学部国際経営学科4年  
千葉県立国府台高等学校出身

澁井 陽紀

## 世界の扉を開く鍵をとれ

初めて大学で友人ができたのは、2021年の3月。大学生活2回目の登校日だ。その人の名前は夏川優花(2024年卒業)。彼女の存在が、その後の私の大学生活を変えることになる。

麗らかな日差しを感じる2021年の春、一部の対面授業は再開されたが、度重なる緊急事態宣言で、世界の暗雲が晴れることはなかった。東京五輪の仕事やオンライン留学などに挑戦し、日本にいなながらも海外とのつながりを築こうとしたが、どこか不完全燃焼だった。そんな中、親交を深めていた夏川優花から学期末に衝撃的なことを言われた。「実は、8月から来年の5月まで交換留学でアメリカに行くことに

なったから、次に会えるの来年になっちゃう」

真の能動性を獲得している人はどんな状況でも前に進むことを止めない。「コロナ禍だから」という枕詞で、挑戦することから遠のいていた、みずから縛る枷の存在に気付いた。

### 多文化が交響する カナダの日々

2022年4月、彼女の行動に啓発され、休学してワーキングホリデーでカナダに渡航することを決めた。実際の就業体験や生活を通じて、本物の世界の文化を理解したかったからだ。到着した最初の5日で、銀行口座の開設、物件探しを終え、インド人オーナーが営む宝石店の地下室で、フィリピンやスリランカから来た6人のルームメイトと共同生活を始めた。彼らは留学生ではなく、家族を母国に残した出稼ぎ労働者だった。正直、住むのに適した環境ではなかった。日光のない部屋には大量の害虫が発生し、風呂場の天井が崩落するなどの事件があった。ま



カナダで住んでいた宝石店

た、生活ルールの認識の齟齬、冷蔵庫の盗難、隣人の部屋のゴミ屋敷化など、文化の違いによるトラブルも日常茶飯事だった。

しかし、この暮らしを通じて多文化共生の実態、移民の過酷な暮らしを学べた。互いの文化の違いを理解し、それに対して寛容になるのは容易ではない。やはり大事なものは、正しいコミュニケーションであった。

カナダの生活の中でほかにも多くの人に出会ったが、最も印象的だったのは永住権を取得した日本人だった。カナダは比較的永住権が取りやすいが、それでも簡単ではない。しかし、彼らは日本以外の場所での自分の居場所を築いてきた強者であり、日本に留まるだけが将来の選択肢ではないことに気付かせてくれた。カナダの滞在中の最後には、現地



初登校は9月の健康診断。FOREST GATEWAY CHUOは建設中だった



来日した友人を夏川と一緒に空港でお出迎え



夏川優花と2人で行ったプレゼンテーション

で稼いだお金を用いてアメリカを一周する旅も決行した。この旅の途中で、学部のオンライン留学で仲良くなったアメリカ人の友人に、ついに会うことができた。オンライン留学だったからこそ、対面での出会いの感動は凄まじかった。今でも彼との親交は続いており、今年の3月には初めて来日してくれた。こうした素晴らしい人間関係を築けたのも、この学部の環境のおかげだと思う。

### 国際人としての黎明

2023年4月。コロナの制限がなくなり、学生たちが活気にあふれた大学。何の因果か、夏川優花と偶然再会した。海外生活を終えた2人は、外の世界で見た抑圧の現実から、この状況を改善する方法を模索し、ソーシャルビジネスに興味を持ち始めた。その活動の第一歩として、フェアトレードのイベントに参加した。フェアトレードは途上国の生産者の

不平等を改善する取り組みで、ソーシャルビジネスと相性が良い。同年10月には、彼女と中央大学SDGsアクションプランアワード2023で「中央大学をフェアトレード大学に！」というテーマでプレゼンし、最優秀賞を受賞した。

正直なところ、人々の努力が完全に報われる社会の構築は難しいが、何とか変えられないか今も考えている次第だ。現在、私は咲川孝教授の下で卒業論文を執筆しながら、スタートアップ企業であるemole株式会社でインターンをしている。この会社は、ショートドラマという新しい市場を開拓しながら、ドラマのクリエイターに利益を還元するエコシステムの確立に取り組んでおり、エンターテインメント業界でありながらも、社会性の高いビジネスを実践的に学べている。卒業後は、ビジネスの本質を理解するため、海外の大学院で起業家精

神論を学ぶ予定だ。また、2024年は8月から1か月間、グローバルFLPのプログラムでロンドンでのインターンシップも予定している。この科目の担当教員である浜口理枝先生は、ロンドンで不動産と国際金融コンサルティング会社を営む経営者で、中央大学の法学部を卒業した先輩である。このインターンシップ

で、国際人に必要な一流のマインドセットとアティチュードを習得したいと考えている。間違いなく、自分の人生の全盛期は今だ。人生で最高の仲間、その出会いをもたらせてくれた大学の環境、そして学費を出してくれた両親に感謝し、前途洋々な未来を切り開いていきたい。

## 国際経営学部だより

# 実践から学ぶ

きむら つよし  
**木村 剛** 国際経営学部教授

国際経営学部では、2年次秋学期から専門演習(ゼミ)が始まります。ゼミでは各教員がそれぞれの専門性や得意分野を生かした特色ある教育を実施しています。私のゼミではPBL(Project-Based Learning)という、プロジェクトの企画・実施から仕事のプロセスやコミュニケーション、リーダーシップを学ぶ手法を取り入れています。

4期生(現3年生)のゼミスタートは昨年9月。2つ目のプロジェクトで与えたテーマは「お互いをより深く理解する」。スポーツを一緒にやる、ビジネスコンテストに参加する、などさまざまな意見が検討され、最終的に国際経営学部1・2年生を対象に「ビジネスコンテストを主催する」ことに決めました。重要な意思決定のみ授業時間に行い、学生間の議論は授業時間外で進めます。私は助言を行う程度、見守り役に徹します。あくまでも「ゼミ生の、ゼミ生による、ゼミ生のための」プロジェクトです。

最大の課題は応募者を集められるのかどうか。株式会社日本能率協会コンサルティング(JMAC)に協賛を依頼、賞金や審査員も提供いただけることになり、ポスターやSNSで告知を頑張った結果、7チームの応募を集めることができました。

春休み中に1次(書類)審査を実施、4月5日には審査員コンサルタントや同社役員をお招きし、最終審査会を実施しました。ゼミ生は前日に集まりリハーサルを実施、当日の運営チームとしてのドレスコードも決めました(私もドレスコードを指示されました)。

このプロジェクトを通じて「お互いをより深く理解する」という目的は十分達成され、それは次のプロジェクトにも生かされています。学生たちはこのような一つひとつの経験から学び、日々、たくましく成長しています。



ビジネスコンテスト最終審査会終了後